

第2章 大御堂廃寺跡を取り巻く環境

第1節 倉吉市の位置

大御堂廃寺跡の所在地である倉吉市は、鳥取県のほぼ中央の内陸部に位置し、北は東伯郡北栄町と湯梨浜町、東は三朝町、西は琴浦町と日野郡江府町、南は岡山県真庭市にそれぞれ接している。昭和28年（1953）に倉吉町、上井町ほか8ヵ村が合併して倉吉市が新設され、平成17年（2005）には東伯郡関金町と合併して新しい倉吉市が誕生した。

鳥取県は、古くから歴史、風土、文化などを共有する広域的な3つの圏域（東部・中部・西部）に区分される。古代の行政区画では東部の「因幡国」と中・西部の「伯耆国」に分かれ、東伯耆にあたる倉吉市には伯耆国の国府（倉吉市国府）が置かれた。江戸時代元和3年（1617）に因伯両国32万石を支配する池田鳥取藩が成立し、寛永9年（1632）より家老荒尾氏に町政を委任した「自分手政治」が行われた。このように、政治の拠点として栄えた歴史があり、現在でも県中部圏域における行政・経済・文化活動の中心都市となっている。市域の総面積は272.06km²、人口は46,158人（令和3年（2021）2月末）であり、県内3番目の規模の都市である。

中国山地を源とする、県下三大河川の一つである天神川が市北東部を南北に、中国地方最高峰の大山（標高1,729m）の東山麓を源とする小鴨川が市南西部から北東部にかけて流下している。これらの河川に沿うように市街地が帯状に連なっており、河川が形成した谷筋には村々が点在している。

市内の主要な幹線道路として、米子自動車道（湯原IC）に接続する国道313号、中国自動車道（院庄IC）に接続する国道179号がある。また、鳥取県沿岸部には山陰自動車道が東西に貫通し、これに繋がる自動車専用道路（地域高規格道路）の北条湯原道路の整備が進められている。北条湯原道路は、米子自動車道から倉吉市を通過し、山陰自動車道へ繋がる重要な道路であり、このうち現在開通しているのは、犬狹峠バイパス・犬狹峠道路・北条倉吉道路と倉吉道路（一部）である。令和2年（2020）度現在、山陰自動車道（北条JCT）からは、倉吉西ICまで開通しており、令和6年（2024）度の福山IC（仮称）までの共用開始に向け整備中である。

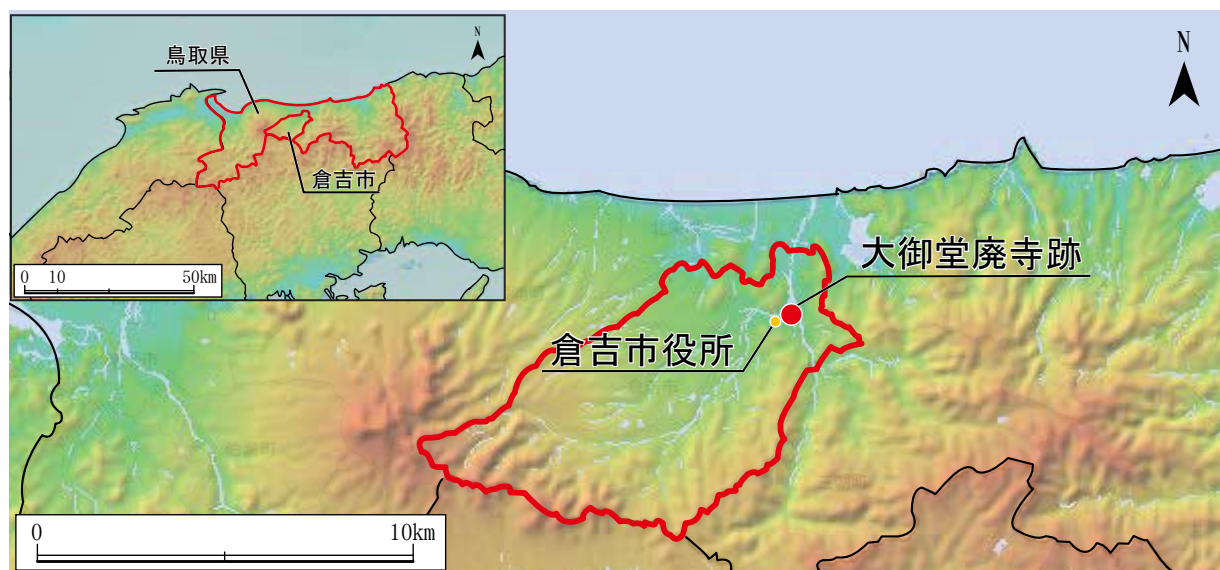


図 2-1 倉吉市の位置図

第2節 自然環境

1 史跡周辺の地形・地質

倉吉市の沖積低地は、天神川流域部と左岸上流部の小鴨川及び国府川流域部に広がる。これらの地域は、地勢及び地質の相違があり、小鴨川流域は、大山麓を源とする火山性地域が大部分で、その流域に広がる低地は扇状地性のものである。一方、天神川流域は対照的に非火山性の地域であり、背後の準平原地域を急勾配で流下し、流域における低地の割合は低くなっている。また、天神川下流域は、北条砂丘等によって閉塞された後の内側に残った潟湖に由来している。

大御堂廃寺跡は、小鴨川と竹田川（天神川）が氾濫を繰り返しながら開析した沖積低地（倉吉盆地）の、両河川の合流点近くに位置する。沖積低地には複数の旧河道が分布しており、大御堂廃寺跡付近にも比較的規模の大きな旧河道が認められる。また、天神川（竹田川）左岸には、自然堤防が形成されている。大御堂廃寺跡の発掘調査では、塔下層に小鴨川水系の河原礫の堆積を確認している。塔・金堂の辺りは暗茶褐色土の堆積する微高地で、それより北の講堂以北は、寺院地として旧河道を整地土により埋め立てて造成したものである。

字大御堂の西に字上湯原・字下湯原と温泉に関係のあるような地名があり、他地域よりも雪が早く溶けるとの伝承があった。倉吉市内の温泉の調査対象地4カ所の一つ、下田中地区で、昭和35～36年（1960～1961）度にボーリング調査が行われたが、基盤は中生代火山岩類の流紋岩で温泉の可能性は低いとの結果となった。従って、湯原の地名は、打吹山と外道山からの伏流水による地下水位の高いことを示していると考えられる。良好な水質から集水埋渠した大御堂廃寺跡の木樋と溜枘の設置が頷ける。

史跡南部の山麓部では、小規模な段丘や扇状地が分布しているのみである。一方、伯耆国分寺跡や伯耆国府跡が位置する小鴨川以西の国府川流域では、段丘が広く分布している。これは大山火山の噴出物が堆積した、いわゆる大山火山岩屑台地である。大山倉吉軽石（DKP）は後期更新世（5万9千年前～5万5千年前）に噴出し、偏西風によって東方へ運ばれ、新潟県から福島県まで分布している。市内秋喜辺りでは4mの堆積があり、多孔質で保水力がよい。大山火山岩屑台地の末端部の打吹山・外道山のような火山噴出による酸性の流紋岩山地や、向山・四王寺山の輝石安山岩、田内城跡の通称「岩阿弥陀」といわれる凝灰角礫岩が孤島のように分布している。

山地を形成している竹田川両岸から小鴨川までは花崗岩山地である。この地方の花崗岩は、古第三紀初期の活動で形成されたものと考えられ、ほとんど風化していて建築用石材には適さないが、品質のよい鉄分が含まれ、精錬によって日本刀の原料になる高品質の玉鋼が得られる。花崗岩や閃緑岩（真砂砂鉄鉱床）の風化した部分を人工的に削り、水と一緒に流して比重の差を利用し砂鉄を採集する「かな流し」が竹田川上流や小鴨川上流で行われた。中国地方では砂鉄を原料にした製錬遺跡が多く見つかかり、鳥根県では古墳時代後期の遺跡がある。

小鴨川と国府川の合流地付近から田内城跡付近に産出する石を三明寺石といい、向山南端の通称「堂庵寺」は石切場で昭和20年（1945）代まで採石されていた。第三紀鮮新世の檜欖石粗面安山岩で、色はやや赤みを帯びているのが特徴である。田内城は自然の岩山を生かした城跡で、三明寺石は大御堂廃寺跡塔心礎のほか、大原廃寺塔心礎（国指定）、不入岡の石仏（県指定保護文化財）、土蔵基壇石や玉川の一枚岩の石橋等に利用されている（佐治孝弑「打吹山とその周辺」『鳥取の自然をたずねて 日曜の地学』赤木三郎編著 築地書館 1997）。

大御堂廃寺跡の南西に在る打吹山は標高204mで倉吉のシンボルとなっている。大御堂廃寺跡

から見る打吹山の山容は秀麗な円錐形である。因伯守護山名師義もろよしが築城した打吹城があったことから城山と呼ばれており、天女伝説が伝わる。その東の山は外道(華到)山で、標高217.8mである。



図 2-2 地形分類図（地理院タイル「治水地形分類図」を元に作成）



図 2-3 地質図（工業技術院地質調査所発行「倉吉」1961 を元に作成）

2 気候

倉吉の気候は、山陰型気候区に属し、全体的に雨も積雪量も少なく、四季を通じて過ごしやすい温暖な気候となっている。

年平均気温（平年値（統計期間は1981～2010年）以下同じ。）は14.6℃であり、月平均気温（平年値）の最高は8月の26.0℃、最低は1月の4.2℃で、その差は21.8℃である。毎年1月又は2月に最低気温が氷点下となる日が多い。年平均降水量（平年値）は1,746.2mmであり、月平均降水量（平年値）は梅雨期の7月が204.6mm、台風期の9月が217.9mmと多くなる。大山山麓に連なる市南西部の小鴨川流域は、他地域に比べて降水量が多い地域である。年平均風速（平年値）は3.4m/sであり、12月から2月までの時期は、月平均風速（平年値）が4.0m/sを超えている。特に、春季には、フェーン現象により異常に乾燥する。月ごとの最深積雪（平年値）は、2月の20cmが最も多い。積雪は12月から3月までの時期で、冬は曇り空が多い。

3 植生

大御堂廃寺跡の周辺はその全域が市街地となっている。倉吉市の植生の殆どは照葉樹林帯である。打吹山の森林が最も典型的な特徴を有する照葉樹林で、ほかに波波伎神社社叢（国指定天然記念物）や伯耆国府の森（市保存林）などの社寺林、岩倉川沿いや四王寺山北斜面などの急斜面などにも、小面積ではあるが、それらの自然植生が見られる。

竹田川と小鴨川の合流点である円谷・下田中付近は、現在は見られないが、竹藪により谷風を防ぎ水田を守っていた。円谷の竹田川左岸に小字藪下がある。田内付近も土手が改修される以前は大きな竹藪があったという。

なお、大御堂廃寺跡の発掘調査では、動植物遺体を多数検出しており、当時の環境を推測することができる。基本的に草地であり、人里近くの日当たりのいい林縁部や川岸に生育する中・低木類、人為的に開かれた場所などに先駆的に侵入してくる種類が多く見つかっている。以下、発掘調査（溜枿）で検出された種類を列記する。

木材 （加工材を除く）：サクラ属、クスノキ科、ヤナギ属、サカキ、タラノキ、クリ、ウツギ属、ユズリハヤマグワ、ヒサカキ、タブノキ属、カヤ、ヤブツバキ、アカガシ亜属、フジ属、クヌギ節、カキノキ属
大型種実 ：モモ、スモモ、サクラ属、ジュズダマ、エゴノキ属、ムクノキ、オニグルミ、ナツメ、オナモミ属、スタジイ、アカガシ亜属、イヌガヤ、ブナ科、クリ、メロン類、ヒョウタン類、ギシギシ属、イネ、コナラ属、シダ類
小型種実 ： 木本類 クマシデ、ブナ科、ケヤキ、アケビ属、サンショウ、カラスザンショウ属、アカメガシワ、ウルシ属、ハゼノキ、ブドウ科、ブドウ属、ノブドウ、クマノミズキ、クサギ 草本類 イネ科、イネ、アワーヒエ、カヤツリグサ科、ホタルイ属、アサ、ギシギシ属、タデ属、サナエタデ近似種、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、ツズラフジ、マメ類、カタバミ属、ナス科、スズメウリ、メロン類、ヒョウタン類、キク科、メナモミ属
主な木本花粉 ：モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、クリ属、ニレ属-ケヤキ属
主な草本花粉 ：イネ科、カヤツリグサ科、クワ科、ギシギシ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、セリ科、オオバコ属、ヨモギ属、キク亜科

（『史跡大御堂廃寺跡発掘調査報告書別冊 史跡大御堂廃寺跡科学調査報告』倉吉市教育委員会 2000）

第3節 歴史的環境

1 寺院造営時の歴史概要

大御堂廃寺跡が作られる前（古墳時代）

寺院造営前となる古墳時代、東伯耆には、丘陵部の至る所に古墳があり、向山古墳群約 560 基、大平山古墳群 230 基、上神古墳群約 200 基など大群集墳が 4～7 世紀まで連綿と造営されている。終末期の盟主墳には向山古墳群に三明寺古墳(国指定)、大平山古墳群に福庭古墳(県指定)があり、寺院建立の経済基盤がうかがわれる。

伯耆国の成立と大御堂廃寺造営（7世紀頃から）

『日本書記』天武 12 年(683) 伯耆造は姓を賜り連となるが、伯耆国造の支配地をもとに伯耆国は 7 世紀に設置とされている。表記は異なるが、藤原宮跡出土木簡に戊戌年(文武 2 年(698))「波伯吉国」がある。伯耆国守の任命は和銅 2 年(709) 金上元に始まり、続いて霊亀 2 年(716) 山上憶良が任ぜられるが、この頃の国庁は不入岡遺跡を比定している。

律令時代、市街地の西方の社地区に伯耆国の国府が置かれた。社は八代とも書き、八代郷は伯耆国久米郡十郷の 1 つである(『和名類聚抄』承平年間(931-938))。国府川の北、久米ヶ原丘陵上に伯耆国庁・国分寺・国分尼寺(国指定)が近接して設けられる。畿内から西の日本海沿岸 8 ヶ国からなる山陰道のほぼ中程に位置する伯耆国は『延喜式』民部省(延長 5 年(927) 完成、康保 4 年(967) 施行)によれば、国の等級は大・上・中・下の四等級のうち上国とされる。京との距離では近・中・遠の三段階のうち、中国に位置づけられる。『和名類聚抄』によると、伯耆国に所属する郡は東より河村・久米・八橋・汗入・会見・日野の 6 郡で、それぞれ 6～10 の郷からなっている。

久米郡は、『出雲国計会帳』の天平 5 年(733) の記事を初見とする。大御堂廃寺跡は、久米郡勝部郷に比定され、『三代実録』貞観 13 年(871) 授伯耆勝宿禰神、従五位下とある勝宿禰神社が近在し、秦氏系の渡来人居住地との関連が窺われる。郡衙の位置は不明であるが、郡名を負う久米郷に置かれていたと推定されている(『鳥取県郷土史』、『鳥取県史』、『新編倉吉市史』)。

「久米氏」を『日本史広辞典』(山川出版社 1997) から引用すると、久米(来目)部の伴造氏族。姓は直。「日本書記」では大伴氏の遠祖天忍日命が来目部の遠祖天櫛津大来目を率いて天降ったとあるが、「古事記」では久米氏と大伴氏とを対等に扱い、ともに鞍・大刀・弓矢をもって降臨に供奉したことになる。また神武東征説話にみえる久米歌や、後世の戦闘歌舞である久米舞などは、久米氏や久米部の軍事氏族としての性格を表している、とある。古えの「久米」を意味していたことに留意しておきたい。

大御堂廃寺は出土遺物から 7 世紀中頃創建と考えられ、「久寺」施印土器から少なくとも 8 世紀前半代には「久米寺」を称していたことがわかる。9 世紀後半代の墨書土器には「久米寺」「久寺」が多い。また、多量の墨書土器と灯明皿は、寺内で祈祷が行われたことを示している。久米郡内には国分二寺以外に石塚廃寺跡(塔：県指定)・藤井谷廃寺跡があり、ともに山陽側との交通路沿いに建立されている。

条里制は古代の区画制度で、条里区画の最小単位である 1 町(約 109 m) 平方の 1 区画を坪といい、地名や区割にその痕跡を残す。大御堂廃寺跡周辺には、松ヶ坪・森ヶ坪・八ヶ坪・石ヶ坪の小字やほぼ正方位の方形区画が認められ、地名や区画の残るこの一帯は水害から免れたことを示している。大御堂廃寺跡はその方形区画に合致しており、大御堂廃寺跡周辺の条里施工が 7 世紀後半まで遡ることが確認されたわけではないが、条里区画に沿って造寺された可能性がある。

9世紀後半以降、藤原氏の摂関政治が確立するに伴い、律令体制は崩壊していった。特に伯耆国は風水害、疫病、飢饉など災害の記録が相次ぐ。加えて、『日本紀略』天曆元年(947)藤原是助が兵400余人を率いて百姓の物部高茂・忠明(前国司)父子の舎屋を焼亡、のように大きな争乱も起きている。これら社会的不安を背景に死後浄土に往生することを願う浄土教が信仰されるようになっていった。

大御堂廃寺跡後(10世紀末以降)の伯耆国

伯耆国守の多くは、院の近臣で受領となった者であり、受領の国政は収奪に終始したものであった。10世紀末～11世紀初頭には、受領の悪政が知られる。長徳3年(997)伯耆守大江清道は「伯耆国已に亡弊^{まさもと}し収益が少ないとの理由で国守を辞退し、代わって源政職が任ぜられた(『小右記』『権記』)。任期中の長保元年(979)には国司の勝手に不動穀を開用しようとしたり、勸学院領を侵犯する事件を起こしている。のち、加賀守に転ぜられたが、寛弘9年(1012)加賀国百姓に愁訴され、寛仁4年(1020)群盗に刺殺された。『今昔物語集』(12世紀前半成立)巻第二十九の「伯耆国府蔵入盗人被殺」は、国府の蔵に餉^{かれい}を盗みに入ったが、蔵の中は空っぽだったという話で、伯耆国の疲弊状況が窺われる。

治安元年(1021)右大臣藤原実資^{さねすけ}(知行国主)の養子資頼^{すけより}が伯耆守に任ぜられる(『小右記』)。苛政であったことは任途中で帰京したときの実資や道長への莫大な貢納物によってわかる。在任中、国司資頼を非難する摂関家への投文・落書事件が京で起こり、土着国司の子孫、紀成任^{きのしげとう}によるものと推定されている。

『伯耆民談記』にみる限りでは荘名は、東伯耆に荘園の数は少なく、西伯耆に荘園が多い。東伯耆の皇室領として稲積荘(倉吉市上米積・下米積辺)、久永御厨^{くえみくりや}(倉吉市大谷・旧大栄町)、矢送荘、山守荘(旧関金町)、摂関家領として笏賀荘(旧泊村)がある。寺社領には石清水八幡宮領山田別宮(旧北条町)、種別宮(旧大栄町)、京都松尾社領東郷荘(旧東郷町)などがある。

仁安3年(1168)から嘉応2年(1170)に大山衆徒^{だいじょうえやく}が大嘗会役を拒否してはじまった争乱(『大山寺縁起』)は、伯耆国衛の兵に三徳山の法師も加わり、国衛勢力と荘園諸勢力との対立に発展した。小鴨氏は「小鴨介」と称し、伯耆国衛の役務にあたる在庁官人の一人である。平安末から鎌倉初期にかけて、東伯耆の小鴨基保と、西伯耆の紀成盛とその一統との対立がある(『大山寺縁起』『吉記』)。

小鴨氏は古氏族「鴨部」の主流で、倉吉平野の大鴨郷・小鴨郷を占拠し、承和6年(839)金石寺鐘(国宝・福岡県西光寺梵鐘)を鑄造した鴨部とも推定される。倉吉市岩倉の岩倉城を居城とし、岩倉には永昌寺の十三重塔(県指定)、広瀬には広瀬廃寺(市指定)・一石調整五輪塔(市指定)・広瀬層塔、大宮に小鴨神社が残る。伯耆国の平家との関わりは、永久5年(1117)平忠盛が伯耆守となって始まり、平家方に属した小鴨氏は、平家滅亡後も東伯耆に勢力を保持し続けた。

鎌倉時代初期、出雲・伯耆守護に任命されたのは佐々木四郎高綱である。文治4年(1188)関金の地藏院の前身寺院である瀧山寺^{ながたに}の復興(『大瀧山縁起書』安永7年)、建久4年(1193)長谷寺の堂宇再建の奉行(『略縁起』)、建久年間長谷観音堂(大慈寺)の堂宇本坊再興の奉行(『由緒書』)に見える。

延元2年(1337)山名時氏が伯耆国守護となる。伯耆国を本拠地とし丹波・若狭に勢力を拡大していく。上灘地区の巖城に田内城を築き、のち嫡男の師義^{もろよし}が延文年間(1356～1360)に打吹城を居城としたという(『伯耆民談記』)。以後、守護山名氏代々の守護所となった。

2 周辺地域の関連文化財

大御堂廃寺跡の周辺には、国指定である伯耆国府跡—国庁跡・法華寺畑遺跡・不入岡遺跡、伯耆国分寺跡をはじめ、大原廃寺跡・石塚廃寺跡・藤井谷廃寺跡などの古代寺院跡や、被葬者が大御堂廃寺跡造営に繋がっていく豪族と推定される向山6号墳・三明寺古墳（国指定）を代表とした古墳が数多く確認されている。大御堂廃寺跡と周辺古代寺院の変遷は、図2-4を参照のこと。また、周辺の遺跡は、図2-5を参照のこと。

また、倉吉市内では、前期から終末期まで古墳が築造されている。県中部の古墳数5,165基のうち、倉吉市内は2,889基であり、県中部全体の56%を占めている。前期古墳である伯耆国分寺古墳（市指定、出土品は国指定）のある社地区が最も多く、次いで大御堂廃寺跡のある上灘地区と国府川上流の高城地区に多い。古代については、以下の表にまとめる。

表2-1 大御堂廃寺跡と周辺古代寺院との関係

不入岡遺跡 (前身国庁)	和銅2年(709)	金上元(新羅系帰化人・前年武蔵国秩父郡の銅を発見)、伯耆守任。
	霊龜2年(716)	山上憶良、伯耆守に任。
国庁跡	天平18年(746)	高丘連河内(百濟帰化人沙門詠の子、楽浪河内。播磨国国司(大目)、天平13年(741)恭仁京の造営)、伯耆守任。伯耆国分寺造営。
法華寺畑遺跡 (国分尼寺)	天曆2年(948)	法華寺焼失。道興寺(大御堂廃寺跡)を替わりとするよう願出。
国分寺跡	天平勝宝8年(756)	因幡・伯耆など26の国に仏具下賜の記事があることから国分寺がほぼ完成していたものと推定される。国分寺に平城宮系の軒瓦を使用。山陰道では伯耆国以外では分布していない。
	天曆2年(948)	国分寺類焼。 伯耆国分寺の火災は天曆2年(948)「太政官断簡」『統左丞抄』に見え、尼寺から出火して二寺とも焼失し、尼寺の機能を道興寺に移したいと願っている。「久米郡に所在し仏殿が広大で雑舎が多数」とある道興寺は大御堂廃寺跡の可能性が高い。国分寺は小規模ながら再建されたものと考えられ、大御堂廃寺跡では、尼寺のための改修が行われた可能性がある。
四王寺跡	貞観9年(867)	四王寺建立。

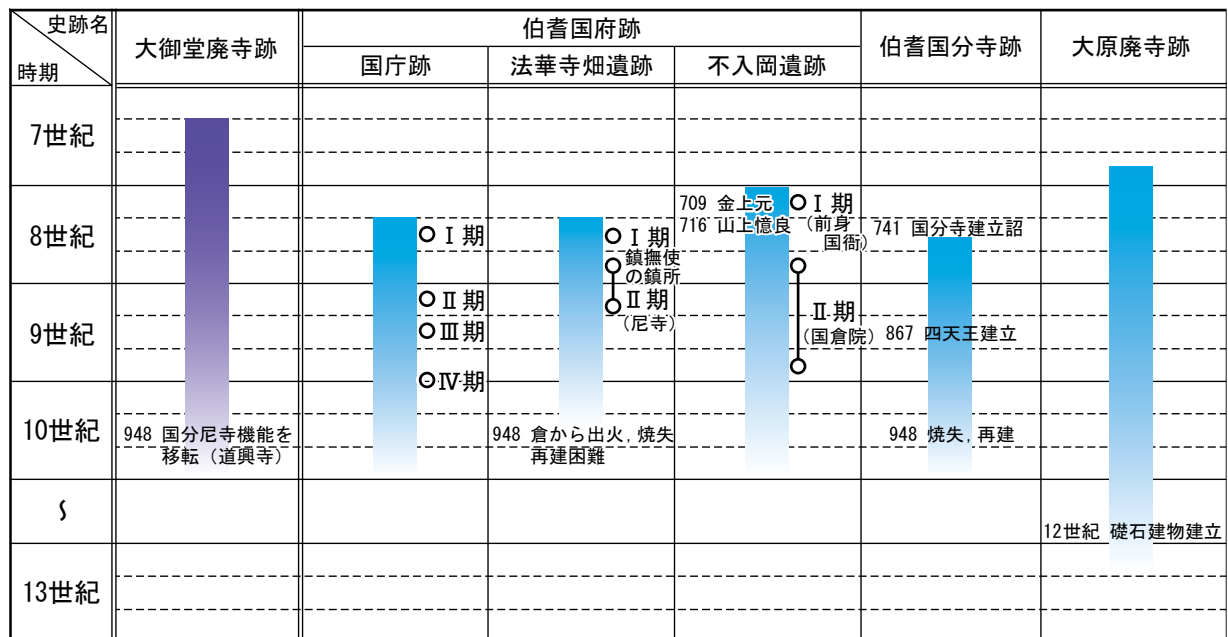


図2-4 大御堂廃寺跡と周辺古代寺院の変遷 ※国指定のみ掲載

今に伝わる文化財

奈良時代以前の仏教美術品は多くはないが、向山の北域で**銅造誕生釈迦仏**2体が見つかったのは注目される。倉吉市井手畑の胎蔵寺(図2-5 2)に伝来したものは7世紀中頃、向山山中の小田字長谷平(a)から開墾中に出土したものは7世紀後半から8世紀初頭(ともに県指定保護文化財)と推定されるが、古代寺院との関係は不明である。

平安時代の仏像の所在地(表2-2)をみると、旧河村郡では八屋の極楽寺(1)のみで、天神川上流には三徳山三佛寺がある。旧久米郡では、平野部に胎蔵寺と下古川村堂(3)が近接し、日本海を望む立地の四王寺(7)を除けば、国府川上流の高城地区に大日寺(6)、同じく北谷地区に大慈寺(5)に仏像群がある。

表2-2 倉吉市内の古代の仏像(平安時代製作)一覽

	寺院名 所在地(古代行政区)	仏像名	像高(cm)	時期	指定等
1	極楽寺 八屋(河村郡 日下郷)	木造薬師如来坐像	91	平安初期風	市
	極楽寺 八屋(河村郡 日下郷)	木造日光・月光菩薩立像	101	平安末期	県
2	胎蔵寺 井手畑(久米郡 神代郷)	木造大日如来坐像	76.3	平安中頃	市
3	下古川村堂 下古川(久米郡 神代郷)	木造薬師如来坐像	128	平安中期 10世紀末 ~11世紀初頃	市
	下古川村堂 下古川(久米郡 神代郷)	木造天部形(体部)	95	平安	市
	下古川村堂 下古川(久米郡 神代郷)	木造天部形(体部)	94	平安	市
	下古川村堂 下古川(久米郡 神代郷)	木造菩薩像(上半部)	50	平安	市
4	満正寺 鍛冶町1(久米郡 久米郷) 石塚の本楠寺末寺とされる北野の安楽寺本尊。元大山寺に祀られていたという。	木造地藏菩薩立像	98	平安後期	市
5	大慈寺 長谷(久米郡 山守郷)	木造十一面観音坐像	161	平安前期	未
	大慈寺 長谷(久米郡 山守郷)	木造持国天立像・増長天立像	108	平安	国・盗難
6	大日寺 桜(久米郡 立縫郷)	木造菩薩形立像	159	平安	県
	大日寺 桜(久米郡 立縫郷)	木造薬師如来立像	150	平安後期	県
	大日寺 桜(久米郡 立縫郷)	石造大日如来坐像	60	平安後期	県
	大日寺 桜(久米郡 立縫郷)	木造天部形立像(伝帝釈天)	136	平安	未
	大日寺 桜(久米郡 立縫郷)	木造如来坐像		平安	未
7	四王寺 大谷(久米郡 八代郷)	木造四天王像 4体		平安中期 10世紀後半 ~11世紀初頃	未・ 焼失炭化

大日寺は、天台宗の古刹で小鴨川の支流、国府川を遡った大山丘陵の奥部に位置する。『伯州櫻山大日寺略縁起』(弘化2年(1845))には、永延2年(988)源信の創建といい、「堂塔数十ヶ所、寺院四二坊、上院中院安養院と三塔に分かれた谷々の構え有り」と広大な寺域であったことを伝える。現大日寺の背後の寺山には9世紀後半の土器散布があるが発掘調査を行っていない。その他、大日寺には延久3年(1071)願主僧成縁(写経僧15人)による**大日寺瓦経塚**、寿永2年(1183)銘の**大日寺上院之鐘**(島根県出雲市鰐淵寺所蔵)も伝わる。

平安時代後半になると天台宗の古刹、東伯耆には三徳山**三佛寺**(三朝町)、西伯耆には**大山寺**(大山町)が成立する。山林修行の場として始まり神仏習合の山岳寺院として発展した。三佛寺の奥ノ院(投入堂・国宝)の**木造蔵王権現立像**(国指定)は、胎内に納められていた願文より仁安3年(1168)頃の造像で、蔵王権現像の中では最古級である。

浄土教の普及を示すものに臨池式伽藍をもつ**広瀬廃寺跡**(弘瀬寺) (8)があり、発掘調査では11～13世紀の小皿が出土している。三善為康撰『拾遺往生伝』巻下に、長暦3年(1039)8月16日に極楽往生した伯耆国弘瀬寺の禅徒円空上人の伝記があり、広瀬廃寺のことと推定される。対岸の丘陵に県内最古、平安時代末期の様式をもつ**一石彫成五輪塔**(市指定) (9)がある。



図2-5 本史跡周辺の寺院 (「地理院タイル」を加工し作成)

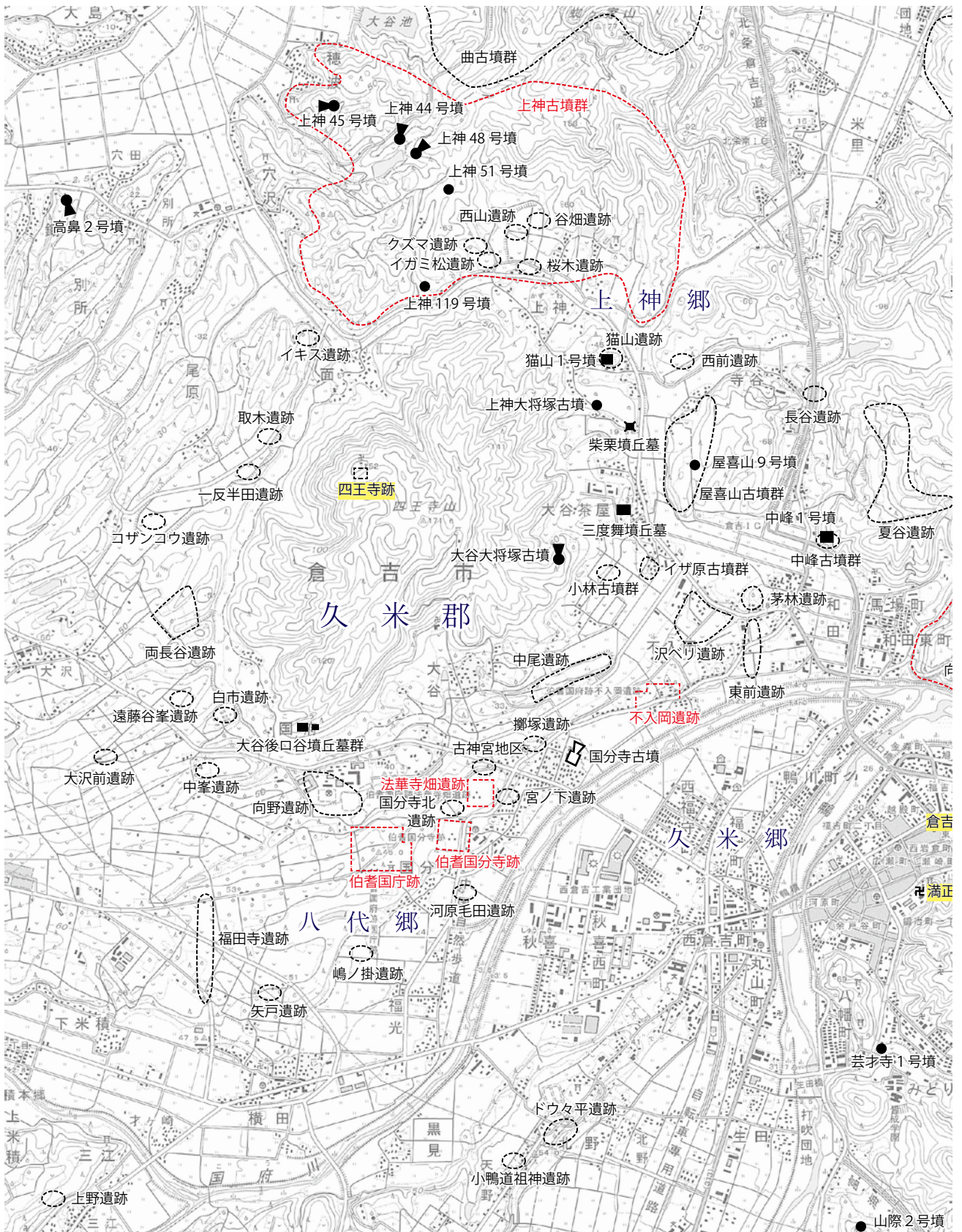
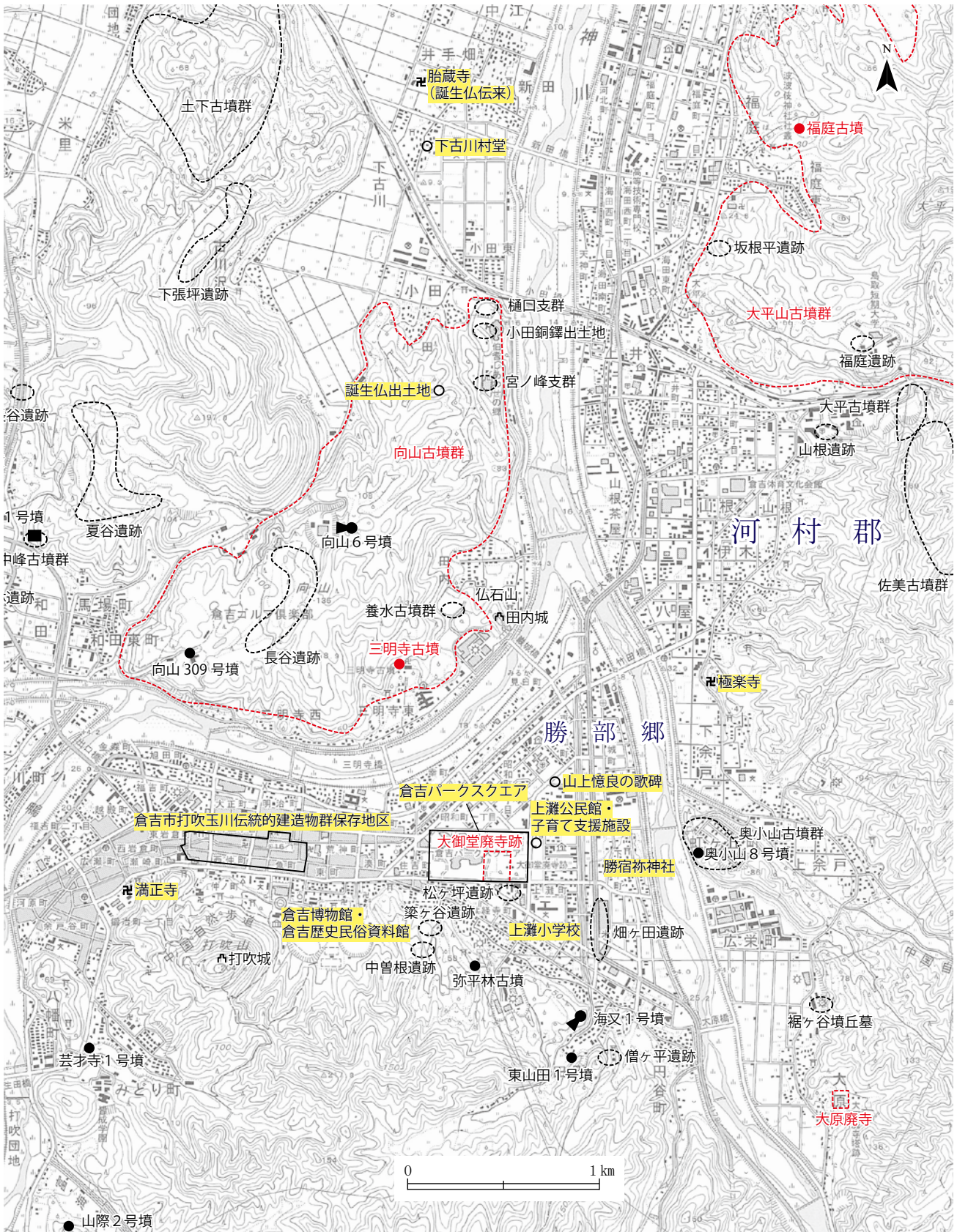


図 2-6 本史跡と周辺の遺跡・寺社・主要施設 (古代郡・郷を青字で表示)



第4節 社会的環境

1 交通

【主要道路】

市内には高速道路への玄関口である「米子自動車道（湯原 IC）」へ繋がる「国道 313 号」、「中国自動車道（院庄 IC）」へ繋がる「国道 179 号」があり、その他にも鳥取県沿岸部を通る「山陰自動車道」、これに繋がる国道 313 号のバイパス道路として整備中の「北条湯原道路」の構成道路として「犬狹峠バイパス」「犬狹峠道路」「北条倉吉道路」「倉吉道路（一部供用中）」がある。

また、山陰自動車道から鳥取県中部へ入るための国道 179 号はわいバイパス道路整備について都市計画決定がなされており、バイパス道路から県立美術館へアクセスする道路整備の検討が始まっている。

このような中国山地を通る中国自動車道からのアクセス、県沿岸部の東西を結ぶ山陰自動車道からのアクセス、それに伴う市内外道路整備は、倉吉市を含む県中部の観光産業にとって極めて重要なものとなってくる。



図 2-7 倉吉市街地へのアクセス経路

※鳥取県中部総合事務所総合管内図中部管内図（国土地理院承認番号：平 30 年中複 第 33 号）を元に作成

【空路】

県内には、東部の鳥取市に鳥取空港（愛称 鳥取砂丘コナン空港）、西部の境港市に米子空港（愛称 米子鬼太郎空港）と、鳥取県出身作家によるマンガに因んだ愛称を持つ空港が2カ所ある。それぞれ、羽田との定期航路をもつ。米子空港は香港、上海、仁川（令和元年（2019）9月運休）との間に国際定期航路（新型コロナウイルスの感染拡大により、3航路全て、令和3年3月現在運休）をもつ。各空港とも倉吉駅との連絡バスが運行されている。

【鉄道】

大御堂廃寺跡の最寄り駅はJR山陰本線倉吉駅である。県内に接続されている特急列車は、以下の7ルートがある。

- ①岡山駅から鳥取駅間を第3セクター智頭急行経由で運行している「特急スーパーいなば」
- ②京都駅から第3セクター智頭急行経由で鳥取駅・倉吉駅間を運行している「特急スーパーはくと」
- ③鳥取駅・米子駅から新山口駅間を運行している「特急スーパーおき」
- ④鳥取駅から米子駅・益田駅間で運行している「スーパーまつかぜ」
- ⑤岡山駅から米子駅・松江駅・出雲市駅間を運行している「特急やくも」
- ⑥東京駅から米子駅・松江駅・出雲市駅間を運行している「サンライズ出雲」
- ⑦大阪駅から鳥取駅間を運行している「特急はまかぜ」

【高速バス】

主要都市と倉吉市をつなぐ高速バスは、①岡山線 ②広島線 ③神戸・大阪線 ④東京線の4ルートがあったが、令和3年（2021）2月に④東京線は廃止された。いずれも倉吉駅を経由する。

【路線バス】

大御堂廃寺跡を含む倉吉パークスクエア周辺には、取り囲むようにバス停が4カ所あり（倉吉パークスクエア北口、倉吉パークスクエア、合同庁舎前、住吉町）JR倉吉駅や三朝温泉など近隣観光地から大御堂廃寺跡までのアクセスの利便が確保されている。また県立美術館開館に向けて、史跡周辺を運行するルート変更（県立美術館駐車場入り口附近にバス停新設 ※P 58 図6-2 参照）の検討が始まっている。

【自家用車】

車での大御堂廃寺跡利用者のため史跡の北東側を進入口とし、史跡東側に106台駐車場を整備している。県立美術館開館に併せて110台駐車可能となる予定である。その他、倉吉パークスクエア内に4カ所の駐車場があり計770台駐車可能である。現状では、本史跡へは自家用車による来訪がほとんどであり、史跡東側の駐車場を利用している（※周辺の公共交通機関の状況については、P 58 第6章第2節を参照）。

2 産業

倉吉市は古くから農業が盛んに行われ、現在では主要なものとして、米、キャベツ、メロン、スイカ、二十世紀梨などが生産されている。商工業の面ではかつて、木綿や倉吉緋、稲扱千歯の生産で有名であったが、緋は明治31年(1898)頃、千歯は大正10年(1921)頃を境に衰微している。近代の主要産業は製糸業で、明治16年(1883)に座操製糸が始まり、中小の製糸工場が倉吉町内にいくつかできた。地元資産家によって創立された山陰製糸会社は本格的機械製糸で明治23年(1890)操業を始め、昭和8年(1933)には郡是製糸株式会社の経営となった。紡績業は大正9年(1920)に山陰紡績が設立され、昭和3年(1928)福島紡績へ引き継がれた(『角川日本地名大辞典』31鳥取県 角川書店 1982)。近代以降は、養蚕業に伴う製糸業など繊維産業が盛んであった。現在では、主に食品製造業、電気機械器具製造業、電子部品製造業などの企業が立地し、製造業が主な産業となっている。

また、観光業においては、倉吉市は市内の「日本の百名湯」に選定されている市内の関金温泉と周辺「三朝・はわい・東郷」の4つの温泉地の玄関口として重要な位置を占める他、「美しい日本の歴史的風土100選」に選ばれた[伯耆の国 国庁跡、国分寺跡、陣屋町倉吉の街並み]がある。中でも、倉吉市打吹玉川伝統的建造物群保存地区の、酒と醤油の香るスポットとして「かおり風景100選」に認定されている白壁土蔵群・赤瓦周辺の街並みのほか、「森林浴の森日本100選」「日本の都市公園100選」「日本さくら名所100選」に選定された打吹山・打吹公園など、地域の魅力を活かした観光資源が豊富に存在している。

3 周辺主要施設

①倉吉パークスクエア

県中部という位置を生かした新しいまちづくりの拠点とするため、鳥取県、倉吉市、県中部の町が整備した文化、観光、娯楽等の各施設が集まる文化複合施設である。

県の施設として「倉吉未来中心」、「二十世紀梨記念館(なしっこ館)」等、市の施設として「倉吉交流プラザ(生涯学習センター、市立図書館)」等があり、県立美術館とともに連携して効果を高める方策が求められている。整備に伴い、既に周辺地域の道路整備、電線地中化整備、バス路線新設等が行われ、生活圏としての利便性が増大し、良好な環境となっている。現在、「倉吉未来中心」の年間利用者は19万人、「二十世紀梨記念館」の年間利用者は11万人である。なお、県立美術館の年間利用者数は18万人を目標にしている。

②倉吉博物館・倉吉歴史民俗資料館

大御堂廃寺跡や伯耆国庁跡・伯耆国分寺跡などの遺物を常設展示している市の施設として、大御堂廃寺跡の西1.2kmに倉吉博物館・倉吉歴史民俗資料館がある。打吹公園内にあり、最寄バス停は「市役所・打吹公園入口」である。国指定重要文化財を含む市内の考古資料、国指定重要有形民俗文化財—倉吉の鋳物師(齋江家)用具及び製品、国登録有形民俗文化財—倉吉の千歯扱き及び関連資料や、倉吉緋などの民俗資料、そして美術部門では郷土とゆかりの深い菅楯彦や前田寛治の作品が展示されている。年間入館者数約4万人である。

③伯耆国守山上憶良の歌碑

史跡の北東 500 m の昭和町第 3 公園（県立厚生病院南）には、
 霊亀 2 年（716）に赴任した伯耆国守山上憶良の歌碑が昭和 54
 年（1979）国際児童年を記念して設置されている。



写真 2-1 伯耆国守山上憶良の
 歌碑（昭和町第 3 公園）

④倉吉市打吹玉川伝統的建造物群保存地区

大御堂廃寺跡の西 1 km には、国選定倉吉市打吹玉川伝統的建
 造物群保存地区がある。倉吉市役所本庁舎から至近距離にあり、
 最寄バス停は「市役所・打吹公園入口」または「白壁土蔵群前」
 である。豊かな意匠を持つ町家が建ち並ぶ本町通りと、土蔵群
 と石橋が連続する玉川沿いからなり、赤瓦・軒の腕木、腰格子
 や繊細な出格子に地域的特色がある。入込客数年間約 65 万人で
 ある。



写真 2-2 倉吉市打吹玉川伝統的
 建造物群（玉川沿い）

⑤上灘公民館

大御堂廃寺跡の東に隣接して「上灘公民館」が所在する。地
 域住民のニーズに合った「住民が集い・学び・連携」の場とし
 て活用されている。4 月初旬には上灘公民館を中心に「うわなだ桜まつり」が開催され、絵下谷
 川桜並木に提灯を下げ、地区住民総参加の祭りとなっている。

⑥倉吉市立上灘小学校

大御堂廃寺跡の南東に位置し、塔心礎と四天柱礎が移設されている。また、上灘小学校の児童
 が中心となり、本史跡南端にある築堤南部分を菜の花ロードと称し、菜の花の植栽を行っている。

⑦子育て支援施設

大御堂廃寺跡北東には、平成 23 年（2011）に建設された 6 階
 建ての市営住宅「うわなだ中央住宅（40 戸）」があり、その 1 階
 に「倉吉市子育て総合支援センターおひさま」が設置されてい
 る。0 歳から就学前の子どもをもつ子育て家庭や子育てサー
 クル、ボランティア活動を支援する施設である。また、その南に
 は「どんぐり保育園」、「上灘児童センター」があり、同センター
 内に学童保育「ぶるーむ学級」が設置されている。



写真 2-3 倉吉市子育て総合支援
 センターおひさま

※②～⑦の位置は、P 20 図 2-6 に掲載。